

# 児童文学作品の翻訳とオノマトペ

～石井桃子訳『クマのプーさん』を例に～

3年7組21番 武田真凜

## I はじめに (アブストラクト)

アラン・アレクサンダー・ミルン (A.A.Milne) の児童文学作品『Winnie-the-Pooh』は、石井桃子により『クマのプーさん』として翻訳された。彼女の翻訳には特徴的な部分が多くあるが、特に著しいのが「オノマトペ」の多用である。原作でオノマトペが登場しないところまでオノマトペを使い訳されているのだ。翻訳には「原作に対する相応の忠実さ」<sup>1</sup>が求められる中で、石井の翻訳は過度な意識と捉えられるかもしれない。しかし、彼女がオノマトペを使うのには理由があるのではないか。翻訳の意義を考えつつ、オノマトペが翻訳後の作品にどのような影響を与えたのかを考察した。

本論文では、石井桃子訳『クマのプーさん』を軸に翻訳とオノマトペについて論じていくにあたり、以下の手順に沿っていきたい。まず、オノマトペとは何か述べ、『クマのプーさん』の概要と作中のオノマトペの総数について整理し (II)、実際どのようにオノマトペが使われているか (III)、オノマトペの表現方法を踏まえた石井桃子の翻訳の意義 (IV) を考察する。最後に、オノマトペの持つ力から、児童文学作品における翻訳とオノマトペの重要性を分析する (V)。

## II 『クマのプーさん』とオノマトペ

翻訳とは一般的に「外国語で表現されたものを、母国語におきかえること」<sup>2</sup>と言われる。しかし、翻訳の本質はそれだけではない。翻訳家・文芸評論家の宮脇孝雄は次のように述べている。

もちろん、外国語が読めなければ翻訳はできませんが、読めるならできるかということ、必ずしもそうではない。／なぜかということ、翻訳は言葉を訳すだけの作業ではないからです。言葉を訳すだけでなく、もう一步踏み込んで、外国語の〈表現〉を日本語の〈表現〉に置き換えること—つまり〈表現〉を訳すことが、翻訳という作業を行う際に一番大事なことなのです。<sup>3</sup>

つまり「翻訳する」とは、ただ単に例えば英語から日本語へ、日本語から英語へ言語を媒介するだけでなく、言語間の〈表現〉の差異を感じ取り、最も翻訳後の言語の〈表現〉に合った訳し方をする事なのである。

このような翻訳の方法が顕著に現れるのが、児童文学作品の英日翻訳だ。特に、石井桃子訳『クマのプーさん』<sup>4</sup>には、特徴的な翻訳が多々見られる。この有名児童文学は、アラン・アレクサンダー・ミルン (A.A.Milne) による『Winnie-the-Pooh』<sup>5</sup>の訳本である。原作発表30年後の1956年に初出版された比較的古い本だ。

主人公クリストファー・ロビンが、彼の友達かつもう一人の主人公である「プーのウィニー」とその仲間たちとともに冒険するお話を、クリストファーのお父さんが息子達に語る形式で物語は進む。まえがき (p.3-6) (Introduction) と、「プーがお客にいて、動きのとれなくなるお話 (p.40-56) (In Which Pooh Goes Visiting and Gets Into a Tight Place (p.22-33))」など10の短編が収録されている。翻訳家・米文学研究家の柴田元幸は、村上春樹との対話の中で、「石井桃

<sup>1</sup> 服部雄一郎 (2008) 『翻訳 その歴史・理論・展望』白水社、p.8

<sup>2</sup> 福光潤 (2007) 『翻訳者はウソをつく!』青春新書、p.15

<sup>3</sup> 宮脇孝雄 (2018) 『翻訳地獄へようこそ』アルク、p.10

<sup>4</sup> A.A.ミルン／石井桃子訳 (1956) 『クマのプーさん』岩波少年文庫 以降、本論における引用は本書を底本とする。

<sup>5</sup> A.A.Milne (1926) 『Winnie-the-Pooh』Puffin Books 以降、本論における引用は本書を底本とする。

子の『クマのプーさん』の訳は本当に素晴らしくて、ああいうのは自分が手を出しても何も新しいことをできそうにないからやってもしょうがないと思う」<sup>6</sup>と述べている。本論では、その中でも特に重要だと思われる「オノマトペ」について焦点を当てて考察していきたい。

オノマトペとは、「擬音語（または擬声語）・擬態語などとも呼ばれてきた言葉の総称」<sup>7</sup>である。「ざあざあ」「ちゃりちゃり」「ワンワン」といった物事や自然界の音、動物の鳴き声など実際の音を言葉で表しているのが擬音語であるのに対して、「てきばき」「のんびり」「はらはら」「しくしく」といった物事や動作の様子、感情、感覚などを音のイメージで捉え言葉で表現したものを擬態語という<sup>8</sup>。これらを全てまとめたのが、「オノマトペ」である。

日本語のオノマトペは豊富にあり、幅広いシーンで使われている。一方、英語のonomatopoeia（オノマトペ）は擬音語が多く、バリエーションが少ない。日本語のオノマトペのほうが微妙なニュアンスの違いが存在し、日本人は巧みにそれらを使い分けているのだ。実際、日本語のオノマトペの数は12000語程度、英語のオノマトペの数は3000語程度と言われている<sup>9</sup>。

石井桃子訳『クマのプーさん』にもたくさんのオノマトペが登場する。計数の結果、127個・83種類のオノマトペが確認できた。これらは、原作でオノマトペが使われ日本語版でも同じくオノマトペに翻訳した場合と、原作ではオノマトペが使用されていないものの翻訳の際にオノマトペが登場する場合がある。結果は以下ようになった。

表1 『Winnie-the-Pooh』と『クマのプーさん』におけるオノマトペの数と割合

『Winnie-the-Pooh』 (原作)	『クマのプーさん』 (翻訳後)	個数（127個中）（割合）
オノマトペ表現あり	オノマトペ表現に翻訳	55個（43.3%）
オノマトペ表現なし		72個（56.7%）

表1にあるように、原作ではオノマトペが使われていない文章でも翻訳の際にオノマトペをふんだんに用いていることがわかる。

Ⅲ章からは、実際に石井桃子訳『クマのプーさん』の中でどのようにオノマトペが使われ、どのような効果を生み出しているか考察していきたい。

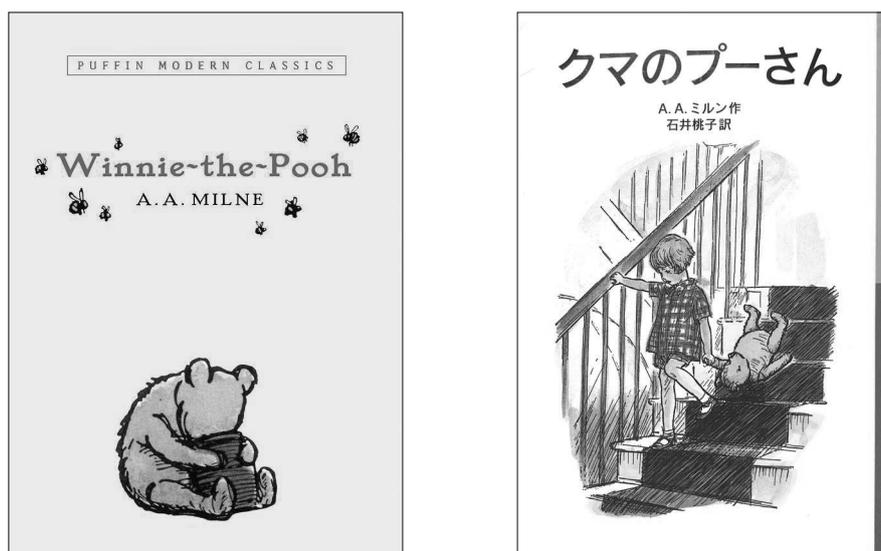


図1 『Winnie-the-Pooh』（左）と『クマのプーさん』（右）の表紙

<sup>6</sup> 村上春樹 柴田元幸（2019）『本当の翻訳の話をしよう』スイッチ・パブリッシング、p.69  
<sup>7</sup> 小野正弘（2007）『擬音語・擬態語4500 日本語オノマトペ辞典』小学館、p.7  
<sup>8</sup> ルーク・タニクリフ（2021）『英語でオノマトペ表現』アルク、p.3  
<sup>9</sup> 灰島かり（2005）『絵本翻訳教室へようこそ』研究社、p.68

### Ⅲ 翻訳で使われるオノマトペ

#### (1) 英語オノマトペの翻訳

『Winnie-the-Pooh』では同じ英語のオノマトペが複数回登場するが、石井桃子はそれらをどのように翻訳しているのだろうか。

表2 オノマトペ“bump”がオノマトペに翻訳される例

	『Winnie-the-Pooh』	『クマのプーさん』
A	HERE is Edward Bear, coming downstairs now, <u>bump, bump, bump</u> , on the back of his head, behind Christopher Robin. (p.3)	そうら、クマくんが、二階からおりてきますよ。 <u>バタン・バタン、バタン・バタン</u> 、頭を階段にぶつけながら、クリストファー・ロビンのあとについてね。(p.15)
B	If he let go of the string, he would fall — <u>bump</u> — and he didn't like the idea of that. (p.18)	もし、風船の糸をはなすとすればさー <u>ドスン</u> —とおちることになる。というのは、プーには、どうも感心できなかった。(p.35)
C	He nodded and went out . . . and in a moment I heard Winnie-the-Pooh— <u>bump, bump, bump</u> —going up the stairs behind him. (p.161)	クリストファー・ロビンは、うなずいて、出ていきました……そして、すぐ、クマのプーさんが、クリストファー・ロビンのあとから、 <u>バタン・バタン、バタン・バタン</u> と、階段をのぼっていく音がきこえてきました。(p.241)

(下線筆者。A～Cは筆者が便宜的につけたもの)

原作では“bump”という同一単語が使われているが、石井訳では「バタン」と「ドスン」に訳し分けられていることがわかる。AとCでは、“bump, bump, bump”と3回繰り返すのに対し、和訳は「バタン・バタン」を2回反復する。Bでは斜体の“bump”が、「ドスン」と翻訳される。このように、場面によって対応するオノマトペを変化させているのはなぜだろうか。

“bump”は英和辞典によると、以下の意味である。

bump 【擬音語】 ① 〈人・物が〉〔人・物に〕ドシン[ドン、ゴツン]と当たる、ぶつかる [against, into]. ② 〈車などが〉〔・・・を〕ガタガタと進んでいく [along].<sup>10</sup>

“bump”は英語のオノマトペ・擬音語として使われ、ドシン、ドン、ゴツン、ガタガタなど様々な訳があるようだ。

表2のAは物語冒頭、クリストファー・ロビンがぬいぐるみのクマのプーさんを持ち、引きずりながら階段を降りてくる場面だから、「①〔階段に〕ぶつかりながら、②進んでいる」のであろう。石井桃子はこれを「バタン・バタン、バタン・バタン」と訳している。無生物であるぬいぐるみが、繰り返しによってリズムよく階段に当たっている様子が想像できる。単体の「ばたん」は本来、「①一度ものが強く当たってたてる耳にひびく音。また、そのさま。」<sup>11</sup>であるが、ある程度の重さはあるつつも容易に引きずれることが、単体の「バタン」でも「バタン・バタン」でもなく、「バタン・バタン」の繰り返しによって現れている。一般的に、清音や半濁音で始まるオノマトペに対応した形の濁音で始まるオノマトペは、強さ・重さなどを感じさせる<sup>12</sup>とされている。巻末のCも同様に階段のシーンであるが、反対にクリストファー・ロビンとぬいぐるみのプーさんは部屋に戻るため階段を上っている。英語版では斜体になり、階段の下りのぼりの違いを表しているとも考えられるが、石井訳ではAと全く同じ、「バタン・バタン、バタン・バタン」が使われる。話の一体感を出すとともに、プーさんがぬいぐるみの状態から物語の中盤で動き話す生物になり、再び物語の最後でぬいぐるみに戻ったことが表されている。

<sup>10</sup> 南出康世 (2014) 『ジーニアス英和辞典 第5版』大修館書店、p.282

<sup>11</sup> 7に同じ、p.338

<sup>12</sup> 7に同じ、p.22

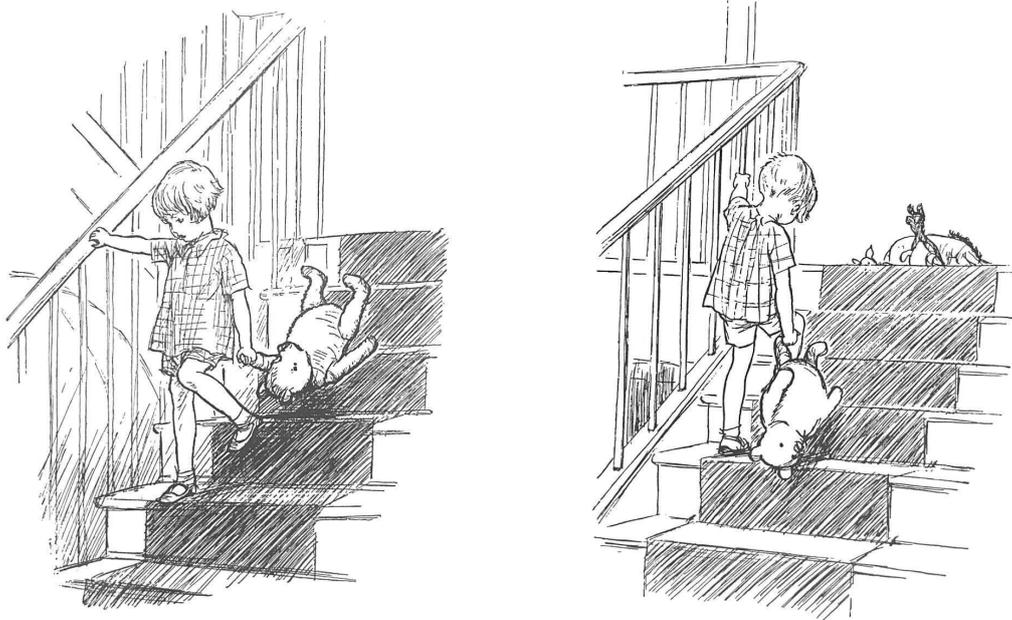


図2 クリストファー・ロビンと、ぬいぐるみのクマのプーさんが階段を上り下りする場面(表2A・C) (挿絵)

“bump”に「ドスン」という訳を当てているのが、表2B、プーさんが風船で空に浮かんでいる場面だ。はちみつを食べるため風船を使おうと飛べたは良いものの、降り方がわからず「ドスン (bump) 」と地面に落ちたらどうしようとプーさんは考えている。まさに辞典の通り「①〈プーさんが〉〔地面に〕ドシンと当たる」恐怖が思い浮かぶ。プーさんが本当に体感した衝撃であるとしたら「ドスン」は重く痛々しい気持ちになるが、この衝撃のオノマトペはプーさんの想像であり実際には危機を回避できる。「ドスン」と訳すことで、プーさんの「大きな体が重力に従い衝撃を伴って落ちてしまうかもしれない」という不安であふれる感情が、「大きく重いものなどが突き当たったり倒れたりしてたてる、力強くにぶい音。また、そのさま。」<sup>13</sup>という本来の意味とともに内包される文になっている。プーさんの想像に過ぎないこの場で「ドスン」と訳すことで、プーさんのドキドキ感を増すことができる。



図3 プーさんが風船で空を飛んでいる場面(表2B) (挿絵)

石井桃子は、英語では1種類のオノマトペである“bump”を場面ごとに「バタン」「ドスン」と訳し分けており、これは日本語オノマトペの多様さを生かして最も状況や感情に適した単語をあてていると言える。

<sup>13</sup> 7に同じ、p.293

(2) 動詞の翻訳

表1にあるように、石井桃子訳『クマのプーさん』では、もともとオノマトペではなく英語の動詞が使われている文章も、多くオノマトペに翻訳している。

表3 動詞“trot”がオノマトペに翻訳される例

	『Winnie-the-Pooh』	『クマのプーさん』
D	(前略) and out <u>trots</u> something brown and fluffy, (後略). (Introduction)	すると、茶色い、毛のはえたものが、 <u>のこのこ</u> 出てきます。(p.4)
E	So off Piglet <u>trotted</u> ; and in the other direction went Pooh, with his jar of honey. (p.79)	そこで、コブタがトコトコかえっていくと、いっぽう、プーはハチミツのつぼをかかえて、またべつの方角へ出かけました。(p.121)
F	So, he <u>trotted</u> on, rather sadly now, and down he came to the side of the stream where Eeyore was, and called out to him. (p.84)	そうして、コブタは、こんどはすこしかなしそうに、トボトボと、イーヨーのいる小川のほとりまでやってくると、声をかけました。(p.128)

(下線筆者。D～Fは筆者が便宜的につけたもの)

“trot”というひとつの動詞が、場面によって「のこのこ」「トコトコ」「トボトボ」と3種類のオノマトペに訳し分けられている。

“trot”は英和辞典によると、以下の意味である。

trot【動詞】①〈馬などが〉速足で進む、トロッコで駆ける (+long, away) ②〈人が〉急ぎ足で行く、(ちょこちょこ)小走りする (+down, off)<sup>14</sup>

“trot”はもともとオノマトペではなく、辞書にも「ちょこちょこ」以外にオノマトペはない。では、石井桃子はなぜこの動詞をオノマトペを使い表現したのだろうか。絵本の翻訳に通じる灰島かりは、日本語のオノマトペの特徴を、以下のように例をあげて英語と比較している。

なぜこれほどオノマトペが多いのかというと、日本語は英語に比べて動詞の数が少ないからでしょう。たとえば「笑う」ですが、英語の動詞をいくつかあげてみます。/ laugh=声を出して笑う / smile=微笑する / chuckle=ほくそ笑む / giggle=くすくす笑う / grin=ニヤリとする / (中略)

ずいぶんたくさんありますよね。これが日本語だと「笑う」「ほほえむ」と動詞が限られているかわりに、「ゲラゲラ」「ケラケラ」「クスクス」「ニヤリ」「ニタニタ」「ヘラヘラ」「ガハハ」とたくさんのおノマトペがあって、さまざまな笑いの様子を伝えることができます。これが日本語の特徴です。<sup>15</sup>

実際、石井桃子は“trot”を「小走りする」という動詞としての訳し方のみでとどめずに、動詞が少ない代わりに豊富なオノマトペを使うことでさまざまな様子を伝えている。

では、それぞれの場面と使われているオノマトペを見ていこう。表3のEは“trot”の意味をそのまま使っている。プーの親友であるコブタがロバのイーヨーのために風船をとり急いで帰る場面だから、「②〈コブタが〉急ぎ足で、(トコトコ)小走りする」様子が目に浮かぶ。「継続する軽い音。足早に、軽やかに歩く音。」<sup>16</sup>という「とことこ」の意味も“trot”の訳とピッタリである。

本来の意味と雰囲気少し違うのが、Dの「のこのこ」である。これは、動物園のオリの戸が

<sup>14</sup> 10に同じ、p.2239

<sup>15</sup> 9に同じ、p.68

<sup>16</sup> 7に同じ、p.290

あけられ「クマくん」が歩いてくる場面だ。「のこのこ」は「何のこだわりもなく、時間をかけて歩くさま。ひとりだけ周囲の状況には無頓着に、姿を現すさま。」<sup>17</sup>という意味であるから、“trot”の英和辞典の訳とは、ずれているように思われる。実際、阿川佐和子の訳した『ウィニー・ザ・プー』では、「たちまち中から茶色いモコモコとした物体が走り出してきます。」<sup>18</sup>と翻訳されている。しかし、プーさんの状況から、石井桃子は「のこのこ」を使い訳すことが最適と考えたのではないだろうか。プーさんはこの場面では「クマくん」と訳され、感情が発露しないただのクマである。「クマくん」がオリから出てきた後、クリストファー・ロビンは「クマくん」の腕の中に飛び込み喜びを表現するが、それに対して「クマくん」は何をしたかの描写がない。クリストファーに対して反応をしない「クマくん」の状況が、この「のこのこ」というオノマトペから表すことができているのである。

さらに、最も“trot”と意味が離れており、並べると表中で違和感すら感じるのが表3Fの「トボトボ」だ。このオノマトペは「①力なくほんの少しずつ行うさま。気力をなくして歩くさま。」<sup>19</sup>を表現する際に使われる。その通りこの場面は、コブタがイーヨーのためにとりに行った風船を割ってしまったために、悲しそうにイーヨーの待つ小川のほとりまで来るシーンだ。場面から考えると「トボトボ」という訳はぴったりと当てはまる。ここで阿川訳を見てみると、「コブタンはトコトコ歩いて、でも今や悲しげに、イーヨーがいる小川のほとりにやってきました。」<sup>20</sup>と訳されており、オノマトペを用いているが「トボトボ」は使われていない。加えて、「トボトボ」は後ろに「トボトボ歩く」としか繋がらず、歩いている状況のみが想像されるオノマトペである。これでは、“trot”の持つ小走りする様子とは大きく外れた翻訳になっている。

これは、「あえてする誤訳」と言えるだろう。翻訳家・評論家の中村保男によると、翻訳中に「こう訳したのでは精密に言うとは誤訳になってしまうとわかっていながら、どうしてもそう訳しないと原文の真意を伝えそこなう結果になる場合」<sup>21</sup>に出くわすことがあるという。そのような場合には、意識的誤訳によって直訳文より“誤訳”のほうがわかりやすい日本文になることがあり、このような“正しい誤訳（あえてする誤訳）”を必要に応じて綴れることも翻訳家としての進歩の一つなのだ<sup>22</sup>。「トボトボ」は、「小走りする」では表せない、コブタのガッカリ感を表現できる。仮にコブタが本当は小走りしていたとしても、「トボトボ」の方が状況が伝わりやすいのである。

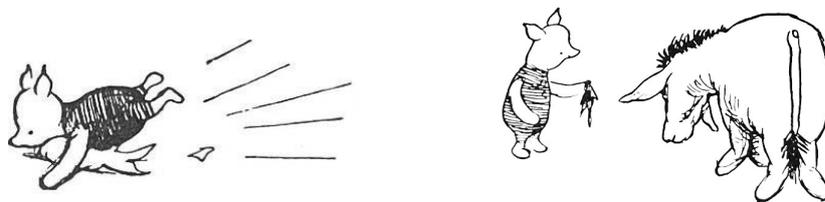


図4 コブタが風船を割った後イーヨーに声をかける場面（表3F）（挿絵）

石井桃子の様々なオノマトペを使い表現した技巧は過度な意識とも捉えられる。しかし、状況に沿った翻訳にするために、原作の英語が同じ単語でも「あえてする誤訳」を交えながら複数の訳・オノマトペを使用することになりえるのだ。

#### IV 翻訳の可能性

##### (1) ユーモアが付与されたオノマトペ

Ⅲ章では英語がオノマトペに翻訳された際の訳し分けとその効果を見てきたが、ここでは原作

<sup>17</sup> 7に同じ、p.323

<sup>18</sup> A.A.ミルン／阿川佐和子訳（2014）『ウィニー・ザ・プー』新潮社、p.2

<sup>19</sup> 7に同じ、p.302

<sup>20</sup> 18に同じ、p.102

<sup>21</sup> 中村保男（2019）『新装版 英和翻訳表現辞典』研究社、p.696

<sup>22</sup> 21に同じ、p.697

中でよく使われる文法がオノマトペに訳される例を挙げ、オノマトペによって伝えられるメッセージを考えたい。

A.A.ミルンは、“rolled and rolled”や“pulled and pulled and pulled”など、“and”を使い、効果的に場面を頭に浮かび上がらせることができる手法を用いている。これらの“and”と英単語の組み合わせでさえも、石井桃子はオノマトペに訳している。

表4 “～ and ～”を翻訳したオノマトペ

	『Winnie-the-Pooh』	『クマのプーさん』
H	(前略) and Winnie-the-Pooh went to a very muddy place that he knew of, and <u>rolled and rolled</u> until he was black all over; (後略). (p.14)	それから、プーは、プーの知ってた、とてもどろんこの場所へ行って、 <u>ごろごろ、ころがったものだから、からだじゅう、まっくろになってしまった。</u> (p.29)
I	Pooh Bear stretched out a paw, and Rabbit <u>pulled and pulled and pulled</u> .... (p.28)	プー・クマが、かたほうの前足をのぼすと、ウサギがひっぱりました。 <u>ぎゅ、ぎゅ、ぎゅ</u> …… (p.49)
J	(前略) and in between Bear felt himself getting <u>slenderer and slenderer</u> . (p.31)	そして、そのまんなかで、プーは、じぶんのからだが、 <u>だんだん、だんだん、ほっそり</u> となっていくのがわかりました。 (p.54)
K	Pooh was walking <u>round and round</u> in a circle, thinking of something else, (後略). (p.35)	プーは、 <u>ぐるぐるまわり</u> ながら歩いていました、なにごとか、ほかのことをかんがえながら……。 (p.59)
L	(前略) and the story <u>went on and on</u> , rather like this sentence, (後略). (p.145)	(前略) その話というのが、 <u>なんだかこの文章のように、だらだら、だらだら</u> とつづいたものですから、(後略)。 (p.217)

(下線筆者。H～Lは筆者が便宜的につけたもの)

表4のH・I・Kは、“動詞 and 動詞”の形で動きの繰り返しが表現されている。同じ動詞を復唱すると、連続して同一の動作をしていることを伝えることができる。日本語でも動詞を二つ重ね、「走りに走った」などという形をとるが、どの動詞も重ねて使用するわけではない。そのため石井はそれぞれ、H「ごろごろ、ころがった」、I「ひっぱりました。ぎゅ、ぎゅ、ぎゅ、(と)」、K「ぐるぐるまわり」、のようにオノマトペと動詞を組み合わせで表現している。

Jのように形容詞の比較級をandで続けると、程度の増加を表すことができる。これはよく「だんだん」というオノマトペを当てて翻訳され、石井もそれを採用している。日本語のように「だんだん」や「いよいよ」などの程度そのものを表すオノマトペは英語に少なく、日本語オノマトペの種類が多さが窺える。

最後に、表3Lの“went on and on”の翻訳として石井桃子は「だらだら」を当てた。だが日本語オノマトペの英語への翻訳案を提示する複数の本では、「そんなにだらだらしないで！」<sup>23</sup>→「Stop being lazy！」<sup>24</sup>や「ダラダラ [dara dara]：怠けていること。/Condition of being lazy.」<sup>25</sup>など、「だらだら」は“lazy”を使って紹介されている。これは「だらだら」というオノマトペを反対に日英翻訳する際、「怠けている」と訳されてしまう可能性があるということだ。ここで“went on and on”の英和辞典における意味を見てみよう。

go on[自] (中略)

<sup>23</sup> 8に同じ、p.052

<sup>24</sup> 8に同じ、p.052

<sup>25</sup> 水野良太郎 (2014) 『オノマトペラベラ マンガで日本語の擬音語・擬態語』 東京堂出版、p.151

(7) [~のことを] 話し [しゃべり] 続ける [about] 《◆go on and onの場合もある》<sup>26</sup>

“went”の現在形、“go”を用いた“go on and on”は「話し続ける」という意味がある。“lazy”（怠ける）という意味を含むオノマトペの「だらだら」を使わずとも、「その話というのが、なんだかこの文章のように、話し続けられてしまったのですから、」と直訳することもできるのではないだろうか。

しかし、ここで「だらだら」を使ったことで、石井桃子は原作にはない自虐のメッセージを付け加えたのだ。自虐を含めることで、ユーモアが付与されていると言える。この文章がまとまりもなく長びいてしまったことと「②ものごとが締めりなく長びくさま」<sup>27</sup>という意味が掛け合わされた「だらだら」というオノマトペは、物語に面白味をプラスすることもでき、この場面に適切なのである。

“~ and ~”の翻訳にも石井はオノマトペをふんだんに使い、繰り返しの動作や増加の様子を効果的に翻訳している。

(2) 石井桃子の翻訳とは

ここまで、『Winnie-the-Pooh』中の表現をいかにして石井桃子はオノマトペを使い翻訳しているのかを調べてきた。それを踏まえ、石井の翻訳の特徴を見ていこう。

翻訳は「原文にないものは入れない、原文にあるものは省かないという立場の人がほとんど」<sup>28</sup>であり、「訳者は黒子であるべき」<sup>29</sup>とまで考える人もいる。その点においては、『クマのプーさん』はオノマトペの多用も含めて翻訳者の姿が強く、あまりにも原作への忠実さが欠けていると言えるかもしれない。しかし、今まで見てきたオノマトペの使い方から、彼女の翻訳には以下の二つの意義があるといえるのではないだろうか。

まず、石井の翻訳方法は、状況・感情をわかりやすく表現することを可能にしている。子どもは言語を習得する際、「まず幼児語を獲得し、それに続いて幼児語と音やリズムに共通点を持つオノマトペを順に獲得していく」<sup>30</sup>と言われている。心理言語学を研究する今井と秋田は、幼児に行った脳波や親との会話に関する実験の結果から「オノマトペは言語のミニワールドである」<sup>31</sup>とし、次のように述べている。

子どもはオノマトペが大好きだ。オノマトペが感覚的でわかりやすいというだけでなく、場面全体をオノマトペ一つで換喩的に表すことができる、声の強弱や発話の速さ、リズムなどに感情をこめやすいなどの理由による。オノマトペは子どもを言語の世界に引きつける。<sup>32</sup>

つまり、幼児期から馴染みのありさらに感覚で伝わるオノマトペは、子どもの頭の中で想像が広がる最大のツールなのだ。特に子どもが読む児童文学作品においては想像のしやすさを重視すべきであることから、オノマトペが多様されると考えられる。その例として『Winnie-the-Pooh』では、挿絵と横書きの性質を利用し「He climbed and he climbed and he climbed, and as he climbed he sang a little song a little song to himself. (p.7)」という文章を、単語ごとに改行することで視覚的に書いている場面がある。だが、翻訳版では挿絵が別ページにあり横書きや改行する配置ができない分、「どんどん、どんどん、のぼっていったが、のぼりながら、みじかい歌をうたった。(p.19)」と、オノマトペを使うことでリズム感から状況を表現している。

<sup>26</sup> 10に同じ、p.914

<sup>27</sup> 7に同じ、p.241

<sup>28</sup> 金原瑞人 (2022) 『翻訳はめぐる』春陽堂書店、p.15

<sup>29</sup> 28に同じ、p.15

<sup>30</sup> 中村一彦 (2020) 「幼児期の言語獲得におけるオノマトペの役割」教育総合研究叢書13号所収、p.5

<sup>31</sup> 今井むつみ 秋田喜美 (2023) 『言語の本質 ことばはどう生まれ、進化したか』中公新書、p.116

<sup>32</sup> 31に同じ、p.117

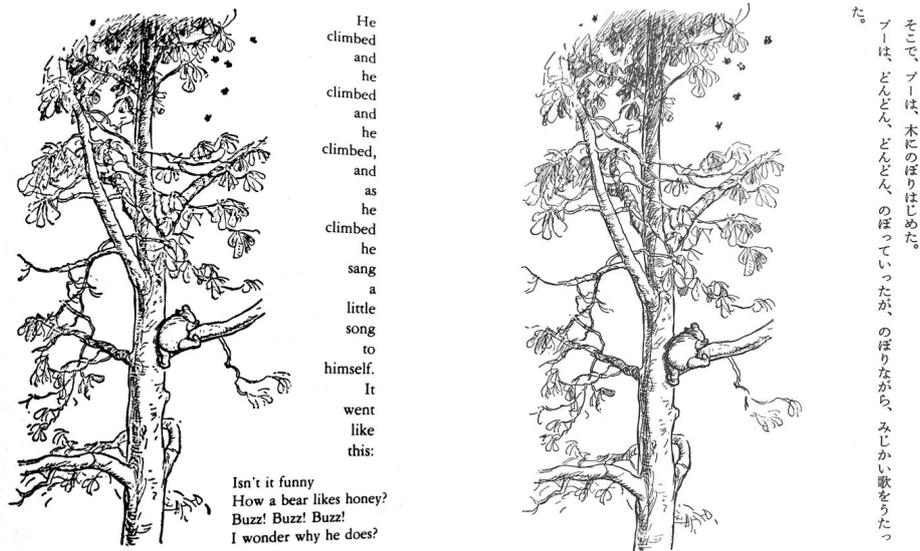


図5 挿絵と横書きを視覚的に利用している原作（左）（『Winnie-the-Pooh』 p.7）とオノマトベが使われている翻訳版（右）（『クマのプーさん』 p.19-21）

「原作を尊重する意識や手を加えて似て非なるものが生まれても、その作品を子どもにあたえようという意識などが重層した産物が児童書である。」<sup>33</sup>と、教育学を専門とする浮田真弓が述べるように、児童書の翻訳は一般書とは一線を画し、新たな翻訳の可能性を生み出している。「児童文学と純文学とでは翻訳できることも違う」<sup>34</sup>のであり、『クマのプーさん』は子どものことを考え「児童文学にはパラフレーズが必要である」<sup>35</sup>ことを念頭に置いて翻訳されたのだ。

それに加え、石井桃子は日本の文化に寄り添った翻訳をしている。翻訳と文化の関係について英文学の北條文緒は、「翻訳は原作の鏡である。ただし特殊な造りの鏡で、原作が属する文化とは異なる文化の装置が一面に嵌め込まれている。」<sup>36</sup>と述べている。原作の国と日本の文化が違うのは当然であり、原作をリスペクトしたうえで日本の文化に寄り添う翻訳がなされているのだ。さらに、柴田元幸は、翻訳家・文芸評論家である鴻巣友季子との対談の中で、古いアイルランドの翻訳では犬の重要性から犬の描写が異様に充実していたという例をあげ、読者に親しみやすくすればそれはそれでいいと翻訳初期には思われていた<sup>37</sup>、と語っている。その国の文化をもとに読者の理解に合わせた翻訳は児童文学でなくても大切なのだ。例えばプーさんの歌の中で「Cos I've got a lot of honey on my nice new noise (p.111)」と、nで韻を踏んでいるシーンがあるが、石井訳では「ぼくのかわいいホヤホヤのお鼻に／うんとこミツがついてるじゃないか (p.168)」とオノマトベにされている。「英語はオノマトベでなく韻を踏むことによって、音遊びとしての要素が入」<sup>38</sup>るが、韻の技術を翻訳に取り入れるのは難解である。音遊びは取り入れつつ、英語の韻を踏む文化を、日本語のオノマトベを多用する文化にうつしかえていると考えられる。

石井桃子の翻訳は、「日本」の「子どもたち」に読まれる『クマのプーさん』が、無理なく理解されるように日本文化に即した訳し方もしている翻訳なのである。

## V オノマトベの力と翻訳

オノマトベは、日本の児童文学にとって欠かせない表現方法である。英日翻訳をする際になかなかぴったりと当てはまる語句がないとしても、オノマトベが助けてくれるだろう。哲学者の驚

<sup>33</sup> 浮田真弓 (1996) 「児童書研究の射程—翻訳論、書物論を手がかりとした考察—」 人文科教育研究23所収、p.65

<sup>34</sup> 6に同じ、p.69

<sup>35</sup> 北條文緒 (2004) 『翻訳と異文化 原作との〈ずれ〉が語るもの』 みすず書房、p.75

<sup>36</sup> 35に同じ、p.151

<sup>37</sup> 鴻巣友季子 (2003) 『翻訳のココロ』 ポプラ社、p.166

<sup>38</sup> 古市久子 西崎有多子 (2009) 「絵本の翻訳に何が影響しているか：日英の絵本を通して」 東邦学誌38巻第1号所収、p.31

田清一はオノマトペをこう表現している。

言い難さを独特の律動と音色とで肩代わりするのがオノマトペであろう。ある音の響きに転換すると、すっと腑に落ちる。音の響きを受けとる聴覚は、響きへの共振として起こる。ものの姿かたちの感触と語音の感触との相似が、そうした共振のつなぎをなす。<sup>39</sup>

オノマトペは音の響きから体に伝わり、想像力を掻き立て、翻訳としてもすっと腑に落ちる訳にしてくれる。

翻訳は「外国語で表現されたものを、母国語におきかえること」<sup>40</sup>だけでは決してない。原作の魅力を読者へ伝え、それでいて物語をより一層輝かせるものだ。オノマトペには、誰が読んでも伝わるわかりやすさで、翻訳後の言語の〈表現〉を際立たせ、作品に息を吹き込む力がある。

(11589文字 原稿用紙29.0枚相当)

---

<sup>39</sup> 鷺田清一 (2011) 『「ぐずぐず」の理由』角川選書、p.128

<sup>40</sup> 2に同じ、p.15

### 【参考文献および関連URL】

- 今井むつみ 秋田喜美 (2023) 『言語の本質 ことばはどう生まれ、進化したか』 中公新書
- 小野正弘 (2019) 『オノマトペ 擬音語・擬態語の世界』 角川文庫
- 小野正弘 (2007) 『擬音語・擬態語4500 日本語オノマトペ辞典』 小学館
- 金原瑞人 (2022) 『翻訳はめぐる』 春陽堂書店
- 鴻巣友季子 (2003) 『翻訳のココロ』 ポプラ社
- 中村保男 (2019) 『新装版 英和翻訳表現辞典』 研究社
- 灰島かり (2005) 『絵本翻訳教室へようこそ』 研究社
- 服部雄一郎 (2008) 『翻訳 その歴史・理論・展望』 白水社
- 福光潤 (2007) 『翻訳者はウソをつく!』 青春新書
- 北條文緒 (2004) 『翻訳と異文化 原作との〈ずれ〉が語るもの』 みすず書房
- 水野良太郎 (2014) 『オノマトペラペラ マンガで日本語の擬音語・擬態語』 東京堂出版
- 南出康世 (2014) 『ジーニアス英和辞典 第5版』 大修館書店
- 宮脇孝雄 (2018) 『翻訳地獄へようこそ』 アルク
- 村上春樹 柴田元幸 (2019) 『本当の翻訳の話をしよう』 スイッチ・パブリッシング
- ルーク・タニクリフ (2021) 『英語でオノマトペ表現』 アルク
- 鷺田清一 (2011) 『「ぐずぐず」の理由』 角川選書
- A.A.Milne (1926) 『Winnie-the-Pooh』 Puffin Books
- A.A.ミルン／阿川佐和子訳 (2014) 『ウィニー・ザ・プー』 新潮社
- A.A.ミルン／石井桃子訳 (1956) 『クマのプーさん』 岩波少年文庫
- 浮田真弓 (1996) 「児童書研究の射程—翻訳論,書物論を手がかりとした考察—」 人文科教育研究23
- 古市久子 西崎有多子 (2009) 「絵本の翻訳に何が影響しているか：日英の絵本を通して」 東邦学誌38巻第1号
- 中村一彦 (2020) 「幼児期の言語獲得におけるオノマトペの役割」 教育総合研究叢書13号